

高等学校学習指導要領の改訂が国語科古典教育に与えた影響について

“About the influence by which a revision of high school curriculum guidelines gave it to national language department classical education.”

都市教養学部人文・社会系

心理学・教育学コース

浅川 哲也

はじめに

戦後の国語科教育の教育課程編成は、『学習指導要領 試案 国語科編』（昭和 22 年 12 月）に出発した。その『学習指導要領』は、国語科教育を「経験主義」と「総合主義」によって規定していると考えられる。「経験主義」とは、国語教育の目標を、児童・生徒に豊富な言語経験を与えることであるとした立場である。また、「総合主義」とは、国語教育を「聞く・話す・読む・書く」のように個別に教育するのではなく、それらの領域を総合的に教育しようとする立場である。

国語教育のこの目的は、国語教育を社会生活に直接結びつけようとするねらいがあったとされるのであるが、これは「国語教育は経験の総合的な積み重ねによって形成される」という一種の経験教育であると考えられる。

しかし、国語教育とは、本来的に「能力主義」に基づく言語教育であるとする立場もある。「能力主義」とは、「聞く・話す・読む・書く」の活動を個別に分けて、指導項目の難易の段階に応じて教育するという分析主義的な立場である。古典教育(古文・漢文)は、教材となる古典が現代日本語ではないので、「能力主義」に基づく明確な言語教育として位置づけられなければならない。

これに対して、『学習指導要領』における国語科の教育課程編成は、改訂を重ねるに従って、「経験主義」としての性質をますます強化しており、言語教育としての古典教育は、国語科教育の中で埋没していくかのような状況にあり、古典教育そのものが初等教育・中等教育において消滅するという危険性すらある。

本稿は、戦後の国語科教育の教育課程編成の変遷を『学習指導要領』における国語科の取扱いの改訂の内容を分析しつつ、考察を加えることを目的とするものである。

1，戦後初期の『高等学校 学習指導要領』の国語科

昭和 20 年以降の高等学校における国語科教育の教育課程上の変遷について、『高等学校 学習指導要領』（以下、『学習指導要領』）に基づいて概観をまとめ、主に必修修科目数の減少や、科目内容の問題について検討する。

昭和 22 年（新制）から昭和 30 年までの高等学校の国語科と標準単位数は、【表 1】のとおりである。この間の『学習指導要領』では、国語科の必修修単位数は 9 単位（1 年を 35 週とみた場合の週あたり 9 コマの授業時数）を下らない。

【表 1】

昭和22年(新制)		昭和26年		昭和30年	
科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数
国語	15ないし9	国語(甲)	9ないし10	国語(甲)	9ないし10
漢文	2ないし6	国語(乙)	2ないし6	国語(乙)	2ないし6
		漢文	2ないし6	漢文	2ないし6
必修修単位数	9	必修修単位数	9	必修修単位数	9ないし10

昭和 26 年の『学習指導要領』では、「国語（甲）」の「各学年の単元展開の例」として、第一学年では「古典はわれわれの生活とどんなつながりがあるか」、第二学年では「短編小説」、第三学年では「国語・国字をよりよくするにはどうしたらよいか」と定めている。『学習指導要領』では、国語科教育における第一として明確に古典教育を位置づけている。「短編小説」とは「現代の短編小説」のことであり、後の「現代国語」に相当する単元内容であるが、これを第二学年に配当している。

また、『学習指導要領』では、「漢文」を独立した科目としており、「漢文体の文章はもとは漢民族の書きことばであったが、訓読された漢文体の文章は、わが古典の中にはいる。ゆえに、漢文は国語科の中で学ばなければならない。」（第七章 国語科における漢文の学習指導）として、「漢文」を古典教育の一環としている。昭和 26 年の『学習指導要領』は、学習目的としての古典教養の育成が重視されていることは明らかである。

昭和 30 年の『学習指導要領』では、「国語（甲）」の学習の範囲を、現代文、古文、漢文、話し方・作文など四つの分野に分けており、分野ごとの授業時間配分の目安を次のように示している。

(分野)	(割合)
現代文	3／10 ないし 4／10
古文	2／10 ないし 3／10

漢文 2/10
話し方・作文 2/10 ないし 3/10

国語科の学習すべき分野として、現代文が筆頭となったが、授業時間の配分をみると、現代文と古文・漢文および話し方・作文とでは3：4：2の比率となり、この間に古典教育を重視する方針に変更はない。

2. 昭和35年以降の『高等学校 学習指導要領』の国語科

昭和35年以降、過去6回にわたる『学習指導要領』の改訂に伴う、国語科の科目および必修単位の推移は、【表2】のとおりである。

【表2】											
昭和35年		昭和45年		昭和53年		平成元年		平成11年		平成21年	
科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数
現代国語	7	現代国語	7	国語Ⅰ	4	国語Ⅰ	4	国語表現Ⅰ	2	国語総合	4
古典甲	2	古典Ⅰ甲	2	国語Ⅱ	4	国語Ⅱ	4	国語表現Ⅱ	2	国語表現	3
古典乙Ⅰ	5	古典Ⅰ乙	5	国語表現	2	国語表現	2	国語総合	4	現代文A	2
古典乙Ⅱ	3	古典Ⅱ	3	現代文	3	現代文	4	現代文	4	現代文B	4
必修単位数	9または14	必修単位数	9	必修単位数	4	現代語	2	古典	4	古典A	2
						古典Ⅰ	3	古典講読	2	古典B	4
						古典Ⅱ	3	必修単位数	4または2	必修単位数	4または3または2
						古典講読	2				
						必修単位数	4				

昭和35年度の『学習指導要領』改訂で、高等学校の国語科に「現代国語」という科目が初めて設定された。現代国語の学習内容と、古典の学習内容の著しい相違に根拠を置いて、「現代国語」を科目として特立させたのである。

昭和35年の当時においては、従来の古典教育が必修科目として保持されることが前提となっていたはずであるが、科目としての「現代国語」は昭和53年の改訂によって消滅した。必修科目として「現代国語」および「古典Ⅰ甲」に取って代わったのは、現代国語と古典の統合科目「国語Ⅰ」である。

それぞれの『学習指導要領』における国語科の必修科目は、【表3】のように推移している。

【表3】											
昭和35年		昭和45年		昭和53年		平成元年		平成11年		平成21年	
必修科目	標準単位数	必修科目	標準単位数	必修科目	標準単位数	必修科目	標準単位数	必修科目	標準単位数	必修科目	標準単位数
現代国語	7	現代国語	7	国語Ⅰ	4	国語Ⅰ	4	国語表現Ⅰ	2	国語総合	4
古典甲	2	古典Ⅰ甲	2					国語総合	4		
古典乙Ⅰ	5										
必修単位数	9または14	必修単位数	9	必修単位数	4	必修単位数	4	必修単位数	4または2	必修単位数	4または3または2

※枠内の破線はどちらかの科目を履修すれば良いという意。

平成 21 年版の『学習指導要領』では、国語科の必履修科目について、「ただし、生徒の実態及び専門学科の特色等を考慮し、特に必要がある場合には、「国語総合」については 3 単位又は 2 単位とし、（中略）その他の必履修教科・科目（標準単位数が 2 単位であるものを除く。）についてはその単位数の一部を減じることができる。」としている（第 3 款 各教科・科目の履修等）。

3. 「国語Ⅰ」・「国語総合」の問題点

昭和 53 年度以降の『学習指導要領』における国語科の教育課程について、古典教育の観点から指摘できる問題点が二つある。

第一に、国語科の必履修単位数の激減である。昭和 45 年度までの『学習指導要領』では、国語の必履修単位数は、「現代国語」と「古典Ⅰ甲」と併せて 9 単位を下ることはなかった。しかし、昭和 53 年度の『学習指導要領』からは、高等学校の卒業に要する国語科の必履修科目は「国語Ⅰ」のみとなり、その標準単位数は 4 単位と半減以下の減少となった。平成元年度の『学習指導要領』も同様である。

さらに、平成 11 年度の『学習指導要領』改訂によって、国語科の必履修科目は「国語表現Ⅰ」と「国語総合」とのいずれかを選択する制度となり、各高等学校の教育課程の編成によっては、「国語表現Ⅰ」のわずか 2 単位の履修修得のみで、国語科に関しては卒業に要する単位を充当することが可能になってしまった。

第二に、国語科の科目内容の質的な変化である。「国語Ⅰ」および「国語総合」は、国語科の領域としての、現代国語・古文・漢文を統合した科目である。昭和 45 年度版までは、「古典甲」あるいは「古典Ⅰ甲」が必履修科目として位置づけられ、高等学校の国語科における古典教育の機会は保証されていたが、「国語Ⅰ」という総合的な統合科目の設定によって、古典教育は、国語科の科目としての独立性を完全に喪失してしまった。事実上、日本の学校教育における古典教育は、この時点から、ほぼ壊滅的な状況に陥ったと言わざるを得ない。

平成 11 年度の『学習指導要領』によると、「国語表現Ⅰ」は、その「内容」の「オ 国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ち及び言語の役割について理解を深めること。」に関連して、「古典の表現法、語句、語彙なども関連的に扱うようにする。また、現代社会における言語生活の在り方や言語表現の役割について考えさせるようにする。」と「内容の取扱い」に示されている。しかし、「国語表現」は「目標」に「国語で適切に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし言語感覚を磨き、進んで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。」と示されているよ

うに、国語による言語表現が科目としての主軸であり、標準単位数が2単位の科目であることから、実態としては、古典教育としての性格は極めて稀薄であったものと考えられる。

平成21年度版の『学習指導要領』では、前述したように、「国語総合」は、国語科の必修科目であっても、その単位数は必ずしも標準単位数の4単位である必要はなく、3単位か2単位でも良いということになる。

教育課程の設置は、高等学校の校長の裁量の範囲であるが、『学習指導要領』において「国語総合」の必修単位数を2単位とすることが可能となると、高等学校の3年間（定時制課程は4年間）に、国語科で古典を学習することなく、高等学校を卒業することが制度上で可能であるということになる。

4. 『学習指導要領』における必修科目の「目標」の変遷

平成元年度版（以下、「平元」とする）、平成11年度版（以下、「平11」とする）、平成21年度版（以下、「平21」とする）のそれぞれの『学習指導要領』に定められた国語科の必修科目「国語Ⅰ」または「国語総合」の「1 目標」を確認しつつ、それぞれの科目における古典教育の教育課程上の位置づけについて検討したい。

【表4】は、「平元」、「平11」、「平21」の『学習指導要領』にある国語科の必修科目の「2 内容」にみられる指導内容の領域を比較したものである。表中の下線部は、古典教育（古文・漢文）に関する内容を含む領域である。

【表4】		
平成元年	平成11年	平成21年
国語Ⅰ	国語総合	国語総合
A 表現	A 話すこと・聞くこと	A 話すこと・聞くこと
B 理解	B 書くこと	B 書くこと
〔言語事項〕	C 読むこと	C 読むこと
	〔言語事項〕	〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

「平元」では、学習領域は「A 表現」と「B 理解」、〔言語事項〕を併せて三領域であったが、「平11」では、「平元」の「A 表現」を「A 話すこと・聞くこと」と「B 書くこと」に細分化するとともに、音声言語の産出と聴解とを文字言語よりも領域として上位に位置づけた点に大きな変化がみとめられる。「平21」では、昭和53年度の『学習指導要領』以来、国語科における指導領域とされてきた〔言語事項〕が消滅し、新たに〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられている。

「平元」、「平11」、「平21」それぞれの「国語Ⅰ」または「国語総合」の「1 目標」

を比較すると、以下のとおりである（下線は筆者による。以下、同じ）。

国語を的確に理解し適切に表現する能力を養うとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。
〈「平元」「国語Ⅰ」の「1 目標」〉

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

〈「平 11」「国語総合」の「1 目標」〉

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

〈「平 21」「国語総合」の「1 目標」〉

下線部は、「平元」、「平 11」、「平 21」間で文言に異なりのみられる箇所である。「平元」と「平 11」とで、「1 目標」の示す能力の育成について、〈理解／読解〉と〈表現〉の優先順位が逆転しており、〈表現〉の能力育成がより重視されるようになったことがわかる。これは、「平 11」の「1 目標」に「伝え合う力」を高めることが示されていることと関わりがある。

平成 8 年に文部省（当時）の中央教育審議会が「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問について提出した第一次答申に示された〔生きる力〕は、経験主義的な教育学理論に依拠する、学校教育における生活体験型学習である「総合的な学習の時間」の科目化と、コミュニケーション能力を重視した各科目の『学習指導要領』の改訂などに具体化されたのであるが、国語科においては、教科指導目標としての「表現」の最優先化にそれが現われたものと考えられる。

5. 『学習指導要領』における必履修科目の「内容」・「内容の取扱い」における古典教育の位置づけの変遷

「平元」、「平 11」、「平 21」それぞれの『学習指導要領』国語科科目「国語Ⅰ」・「国語総合」における「2 内容」および「3 内容の取扱い」にみられる特徴を挙げつつ、それぞれの科目における古典教育の教育課程上の位置づけについて検討する。

「平元」の「国語Ⅰ」の「3 内容の取扱い」では、古典教育に関する内容のBの指導上の配慮として次の事項があげられている。

- (3) ア 古典と近代以降の文章との授業時数の割合は、おおむね同等とすることを目安として生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方だけに偏らないようにすること。
- (5) 教材は、古典及び近代以降の文章の中から生徒の発達段階に即して、適切な話題や題材を精選して取り上げるものとする。その際には、表現力と理解力とを偏りなく育てることをねらいとしながら、次のような観点に配慮する必要がある。

「平11」の「国語総合」の「3 内容の取扱い」では、古典教育に関する内容のCの指導上の配慮事項は以下のとおりである。古典（古文・漢文）と、「近代以降の文章」すなわち現代文とは、授業時数で対等の比率とすることが明記されている。

- (4) ア 古典と近代以降の文章との授業時数の割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること。
- (イ) 考えを広げるため、様々な古典や現代の文章を読み比べること。

また、「平11」の「国語総合」では、「3 内容の取扱い」で、「内容のA」・「内容のB」について、授業の標準時間を示すという異例の指示をしている。古典教育が含まれる「内容のC」にこの種の指示はない。

内容のA

- ア 話すこと・聞くことを主とする指導には15単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導を行うこと。

内容のB

- ア 書くことを主とする指導には30単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導を行うこと。

1単位時間を50分とし、35単位時間の授業を1単位として計算することを標準とするので、「国語総合」の標準単位数を4単位とすると140単位時間となる。この場合、

「内容のC」は95単位時間となり、その範囲内で「古典（古文・漢文）」と「近代以降の文章」とをさらに配分することになる。

「平21」の「国語総合」では、「C 読むこと」の指導事項に「(2)ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。」という従来の『学習指導要領』にみられない特色がみられる。

「平21」の「3 内容の取扱い」での古典教育に関する内容のCの指導上の配慮事項および「教材についての留意事項」は、以下のとおりである。

「3 内容の取扱い」

ア 古典を教材とした授業時数と近代以降の文章を教材とした授業時数との割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること。

(6) 教材については、次の事項に留意するものとする。

イ 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。また、古典に関連する近代以降の文章を含めること。

「平元」、「平11」、「平21」のいずれも、「古典を教材とした授業時数と近代以降の文章を教材とした授業時数との割合は、おおむね同等」とすることとなっているが、実際の教科内容として「古典」は「古文・漢文」であるから、「古文・漢文・現代文」として考えると、2.5 : 2.5 : 5 という比率となり、昭和45年以前の『学習指導要領』の国語科の教育課程と比較すれば、全体の授業時間数における古典教育の激減は明白である。

6, 現行『学習指導要領』（平成21年度版）による高等学校教育課程編成と古典教育
高等学校の在学時に、国語科の科目をどのように履修したか、その実態を調査するために、現行の『学習指導要領』の教育課程による高等学校を卒業した大学学部生を対象として、以下のように質問紙法によるアンケート調査をした。

- (1) アンケート調査場所：都内にある私立大学の教員養成系学部。
- (2) 調査実施日：2017年5月10日
- (3) アンケート調査対象：都内私立大学の教員養成系の学部で、卒業所要科目とな

る基礎的な内容の古典文学と古典文法についての講義（以下、「古典基礎」と仮称する）を履修・受講する学部生。

（４）調査対象者の内訳：１年生 100 名（男子 40 名・女子 60 名）、２年生 10 名（男子 7 名・女子 3 名）、３年生 10 名（男子 6 名・女子 4 名）、４年生 8 名（男子 5 名・女子 3 名）、合計 128 名（男子 58 名・女子 70 名）

（５）アンケートの質問内容：Ｑ１，高等学校の３年間に受けた国語の授業科目のすべてに○をつけてください。

（ ）「国語総合」（週に４時間の授業、必履修科目）

（ ）「国語表現」（週に３時間の授業、選択科目）

（ ）「現代文 A」（週に２時間の授業、選択科目）

（ ）「現代文 B」（週に４時間の授業、選択科目）

（ ）「古典 A」（週に２時間の授業、選択科目）

（ ）「古典 B」（週に４時間の授業、選択科目）

Ｑ２，高等学校で古文の授業を受けた経験がありますか？

（ ）ある （ ）ない （ ）覚えていない

（５）のアンケートＱ１の回答結果によって、高等学校の間に履修した国語科の科目名を集約したものが【表５】である。

整理番号（１）のように、「国語総合（４単位）・現代文 B（４単位）・古典 B（４単位）」という組み合わせでの履修が 47 名と人数上では最も多い（全体比 36.7%）。文系の大学に進学する予定の高等学校の生徒としては、これが一般的な科目の履修方法であると考えられる。

履修の方法としては、整理番号（２）「国語総合（４単位）・現代文 A（２単位）・古典 A（２単位）」の組み合わせがこれに次ぐ（全体比 10.9%）。整理番号（３）のように、現代文 A・B と古典 A・B を両方とも履修した学生も多い（全体比 10.2%）。いずれも、文系の大学受験を目途としたカリキュラムであると思われる。

しかし、整理番号（７）のように、高等学校の３年間で、「国語総合」しか履修していないと回答した学生が 4 名いる（全体比 3.1%）。教育課程上では、国語科では最低限の履修単位数となり、整理番号（１）～（３）の学生に比較して、古典の授業時間数が圧倒的に少ないことが窺える。

問題となるのは、整理番号（22）～（31）のように、必履修科目であるはずの「国語総合」を履修していない、と回答した学生が 14 名もいるという結果である（全体比で 10.9%）。

これは、回答者の学生が高等学校で履修した国語科の科目名を正しく記憶していなかったということか、あるいは、アンケートの質問文では「「国語総合」(週に4時間の授業、必履修科目)」となっているため、当該の学生の在籍していた高等学校で「国語総合」を標準単位数の4単位ではなく単位数を減じた教育課程編成をしていたために、自分が履修した科目名を正しく選択できなかったという可能性もある。

また、整理番号(27)・(29)・(31)のように、高等学校の3年間で「国語表現(3単位)」または「現代文A(2単位)」・「現代文B(4単位)」しか履修しなかったという回答をした者が3名いる(全体比2.3%)。これはアンケートの回答としての信頼性に関わる例であるが、少なくとも、これらの回答者においては、高等学校において古典教育を受けたという認識が極めて稀薄なものであるといえるであろう。

なお、アンケートQ2の「高等学校で古文の授業を受けた経験がありますか？」という問いの結果は、「ある(124名)、ない(3名)、覚えていない(1名)」であった。そのアンケートの回答の真偽はともかくとして、高等学校において「古文(古典)の授業を受けた記憶がない」と言明する大学生が僅かながらも現実に存在するということは、古典教育に携わる大学教員としては衝撃的な結果である。

【表5】

整理番号	国語総合 4単位	国語表現 3単位	現代文A 2単位	現代文B 4単位	古典A 2単位	古典B 4単位	人数	%
(1)	○			○		○	47	36.7
(2)	○		○		○		14	10.9
(3)	○		○	○	○	○	13	10.2
(4)	○		○			○	6	4.7
(5)	○		○	○	○		6	4.7
(6)	○			○	○	○	4	3.1
(7)	○						4	3.1
(8)	○	○	○	○	○	○	2	1.6
(9)	○		○		○	○	2	1.6
(10)	○	○		○		○	2	1.6
(11)	○					○	2	1.6
(12)	○			○	○		2	1.6
(13)	○			○			2	1.6
(14)	○	○		○	○	○	1	0.8
(15)	○	○	○		○	○	1	0.8
(16)	○				○	○	1	0.8
(17)	○	○	○			○	1	0.8
(18)	○	○	○	○	○		1	0.8
(19)	○	○	○		○		1	0.8
(20)	○	○			○		1	0.8
(21)	○				○		1	0.8
(22)			○	○	○	○	3	2.3
(23)		○		○		○	1	0.8
(24)				○		○	3	2.3
(25)		○	○		○		1	0.8
(26)			○		○		1	0.8
(27)		○					1	0.8
(28)			○	○			1	0.8
(29)				○			1	0.8
(30)		○	○				1	0.8
(31)			○				1	0.8
							128	100.0

おわりに

経験主義の教育学理論に基づく『学習指導要領』の数度にわたる改訂によって、伝統的な古典教育の形骸化または空洞化が急速に進行している。本来、言語教育として、能力主義教育であるべきところの国語科教育が、経験主義教育の方向に向けて、大規模に解体されている過程にあるのである。

学校教育の現行の制度上において、古典教育は、存続そのものが危ぶまれる危機的な状況にあるものと考えざるを得ない。

【参考文献】

- 浅川哲也（2005a）「国語科教育と言語教育の関わりについて」『明星大学通信制大学院研究紀要—教育学研究—』Vol.5
- 浅川哲也（2005b）「古文は声に出して読めるのか—古文音読指導上の問題点—」『国語界』（全国高等学校国語科指導研究会）第 52 号
- 浅川哲也（2017）「国語科教職課程における「日本語学概論」の意義と問題点—〈五十音図〉を正確に書けない大学生—」『首都大学東京教職課程紀要』第 1 集
- 石井直樹（2007）「新高等学校学習指導要領と古典教育の現状—問題の所在と提言(1)—」『上智大学国文学論集』第 40 号